鹿児島大学リポジトリ
Kagoshima University
Repository

ハンセン病療養施設の歴史的変遷に関する研究 ： 国立療養所沖縄愛楽園の事例

著者	"友清 貴和, 脇田 正恵, 原 しのぶ"
雑誌名	鹿児島大学工学部研究報告
巻	45
ページ	51-56
別言語のタイトル	A SUTADY OF HISTORICAL TRANSFORMATION OF SANATORIUM FOR HANSEN'S DISEASE
URL	http://hdl.handle.net/10232/616

ハンセン病療養施設の歴史的変遷に関する研究 ： 国立療養所沖縄愛楽園の事例

著者	友清 貴和, 脇田 正恵, 原 しのぶ
雑誌名	鹿児島大学工学部研究報告
巻	45
ページ	51-56
別言語のタイトル	A SUTADY OF HISTORICAL TRANSFORMATION OF SANATORIUM FOR HANSEN'S DISEASE
URL	http://hdl.handle.net/10232/00006257

鹿児島大学工学部研究報告　第45号（2003）

ハンセン病療養施設の歴史的変遷に関する研究

ー国立療養所沖縄愛楽園の事例ー

友清貴和*　　脇田正恵**　　原しのぶ***

A SUTADY OF HISTORICAL TRANSFORMATION OF SANATORIUM FOR HANSEN'S DISEASE

Takakazu TOMOKIYO, Masae WAKIDA and Shinobu HARA

An patient habitation space is what thing furthermore about how the Hansen's disease medical-treatment institution changed in Okinawa Prefecture, as for the purpose of research, and it is showing clearly how it changed. And it aims at grasping the feature by comparison with the Hansen's disease sanatorium (National Sanatoria Hoshizuka Keiaien) of a mainland.

Keywords: Hansen's Disease,Okinawa Airakuen,arrangement, historical transform, life space

1．研究の背景

日本のハンセン病に対する対策は1907年の「癩予防ニ関スル件」の制定に始まる。1931年に全面的に改正され1953年には「らい予防法」となり、全ての患者を療養所に終生隔離するという厳しい対策をとった。1996年の「らい予防法の廃止」によって一般医療機関で治療されることとなる。

一方沖縄県は、「第1回全国らい一斉調査」(1900年）において、有病率が全国平均を上回り、以降行なわれた調査でも有病率の高い県として常に認知されていた。また終戦後は、本土との行政分離を強いられ本土の政策をもとに、独自のハンセン病政策がなされてきた。

2．研究の目的

本研究は終戦（1945年）から本土復帰（1972年）までの27年間米軍統治下にあり、本土と行政分離をされた沖縄県において、ハンセン病療養施設がどのように変遷していったのか、また、入所者の居住空間はどのようなものであり、どのように変遷していったのかを明らかにする。そして、本土のハンセン病療養所（鹿児島県鹿屋市にある国立療養所星塚敬愛園）との比較により、特徴を把握することを目的としている。

2003年8月31日受理
*　　建築学科
**　　博士前期過程建築学専攻
***　　建築学専攻研究生

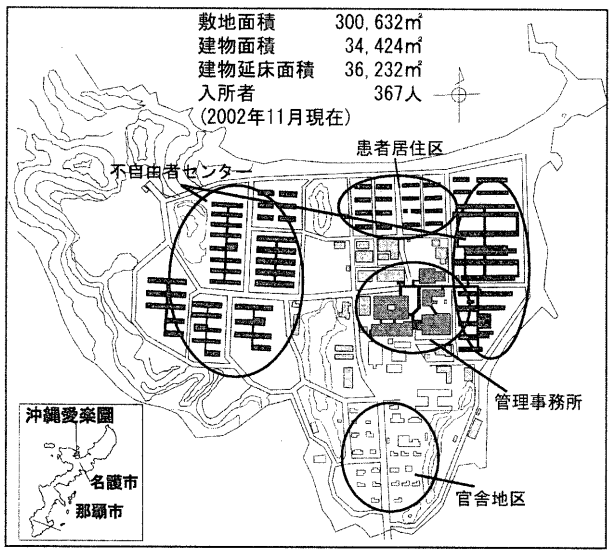


図-1 沖縄愛楽園配置図

3. 研究の方法

本研究において以下の3つの作業を行った。
①ハンセン病に関する資料・文献および配置図・平面図の収集を行う。(2002年9月19～21日、10月9～12日に沖縄愛楽園と沖縄県公文書館を訪問)
②年代ごとの配置図をもとにハンセン病療養施設の歴史的変遷についてまとめる。
③国立療養所星塚敬愛園と居住空間の比較・考察を行う。

4. 調査対象施設概要

今回、調査の対象とした施設は名護市にある国立療養所沖縄愛楽園(以下、愛楽園と記す)である【図-1】。

開園当時の収容患者数は315人(定員250人)敷地の総面積54,246㎡、建物棟数50棟、建物延面積2,537㎡であった。入所者数は、1944年日本軍により行われた強制収容によって835人まで増加するが、戦時中の逃走者や戦後の生活の苦しさで死亡する人が多発し1946年に518人まで減少する。1959年には米軍により再び強制収容が行われ947名とピークに達したが、その後軽快退所者の増加や新発生患者の減少により入所者数はゆるやかに減少している。【図-2】近年は高齢化の進行により2002年11月現在平均年齢は73.5歳と高くなっている。

5. 沖縄におけるハンセン病対策の歴史

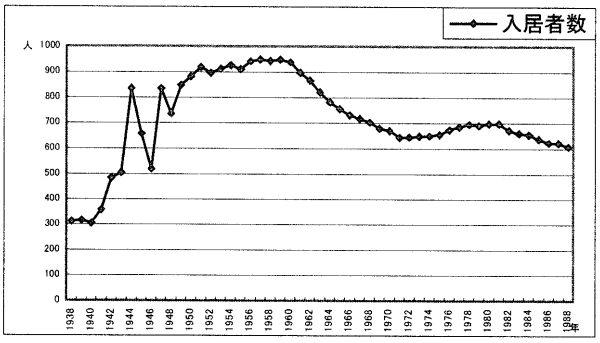


図-2 沖縄愛楽園における入所者数の推移

5.1 開園当初(1938年～1943年)

日本MTL[注1)]の救癩活動で沖縄MTL[注2)]相談所を設置。1938年11月名護市屋我地島にハンセン病療養施設「県立国頭愛楽園」が開園。

5.2 沖縄戦前(1943年～1945年)

1941年7月1日に厚生省に移管。愛楽園の定員は450人になり、施設拡張工事が進められる。

5.3 琉球列島米国民政府時代(1945年～1951年)

戦後、一時的に沖縄行政は真空時代となったが、間もなく米軍政府がらい行政を行うことになった。

5.4 琉球政府時代(1951年～1972年)

1952年、琉球政府の創立にあたり、療養所は琉球政府に移管。沖縄愛楽園と改称される。1961年8月、琉球政府は「琉球ハンセン氏病予防法」を制定、公布。本土の「らい予防法」にない「在宅治療制度」という制度が織り込まれた。

5.5 本土復帰(1972年～)

1972年5月、本土復帰によって「ハンセン氏病予防法」は廃止になった。法廃止後も沖縄のみ「在宅治療制度」は継続実施され、今日に至っている。以上のように、ハンセン病対策の経緯は区分される。

6. 建物配置の変遷 【図-3】

6.1 開園当初

開園当初は沖縄MTL寄附にかかる2棟をはじめ、1棟165㎡の平屋建瓦葺の居住棟が10棟。この他共同炊事場、消毒室、重病室、浴場、売店、理髪室、隔離病棟、洗濯場、礼拝堂、事務本館、医局、薬局、試験室、治療室、面会室、それに職員官舎の

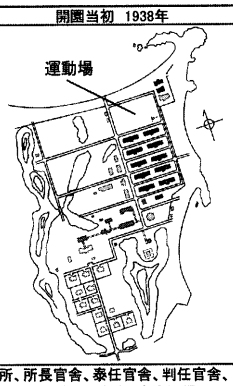
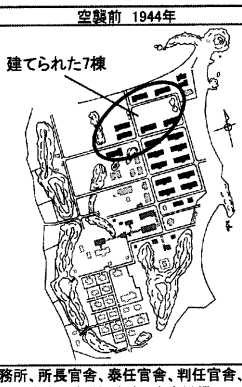
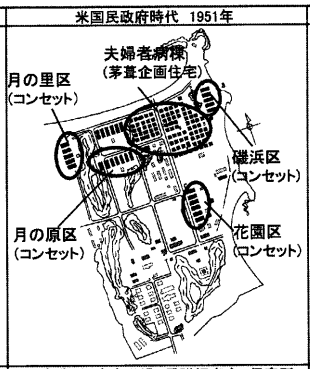
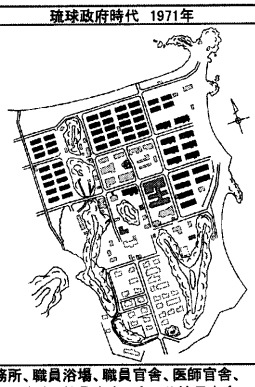
	開園当初 1938年	空襲前 1944年	米国民政府時代 1951年	琉球政府時代 1971年
建物配置 患者区 医療区 その他の施設 管理・官舎区				
管理施設	事務所、所長官舎、泰任官舎、判任官舎、雇用人官舎、看護婦官舎、官舎浴場、職員浴場	事務所、所長官舎、泰任官舎、判任官舎、雇用人官舎、看護婦官舎、官舎浴場、職員浴場	本館事務所、官舎浴場、看護婦官舎、保育所、一級官舎、二級官舎、三級官舎、付属更衣室	事務所、職員浴場、職員官舎、医師官舎、看護婦官舎、教員官舎、済井分校長官舎、来客用宿舎、保育所、
医療施設	医業局、試験室、治療棟、消毒室、重病棟、隔離病棟、更衣室、死体処理室	医薬局、試験室、治療棟、消毒室、重病棟、隔離病棟、更衣室、死体処理室、精神病棟、	医局薬局、治療棟、重病棟、精神病棟、試験室、薬品庫	治療棟、精神病棟、旧精神病棟、A病棟、B病棟、病棟浴場、医官室、薬局、洗濯・消毒室
その他	監禁室、患者面会室、患者浴場、礼拝堂、洗濯・裁縫室、売店・理髪店、作業室、倉庫、監視所、共同便所、炊事場、食糧品庫、動物飼育室、火葬場	監禁室、患者面会室、患者浴場、礼拝堂、洗濯・裁縫室、売店・理髪店、作業室、倉庫、監視所、共同便所、炊事場、食糧品庫、動物飼育室、火葬場、恩賜記念館、豚舎	礼拝堂、工務部事務所、工務部資料倉庫、火葬場、畜舎、肥料倉庫、共愛会事務所、炊事場4	中央炊事場、自治会事務所、パスマン会館、公会堂、日曜会館、納骨堂、教会堂、盲人会館、売店、理容室、教会堂、面会室、職業補導所、洗濯場、集会・配給所4
居住棟	患者住宅、夫婦住宅	患者住宅、夫婦住宅	男子不自由者病棟、青年宿舎、独身者病棟4、夫婦者病棟3	独身不自由者寮、夫婦不自由者寮、児童寮、盲人寮、独身者住宅3、夫婦者住宅9、老人ホーム、モデル不自由者寮

図-3　年代ごとの配置図

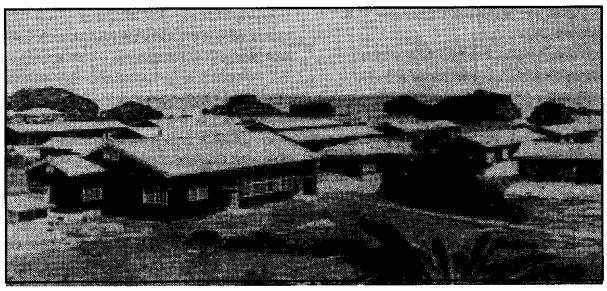


図-5　木造瓦葺平屋住宅（居住者棟）

高等官、判任官、傭人官舎と53棟の建物があった。開園から6年間は、木造瓦葺住居での生活だった。

6.2　戦時中

1941年施設拡張工事が進められ、これまで運動場として利用されていた場所に居住棟が7棟建てられた。当時の愛楽園は純日本風の切り妻造り住宅で、計65棟の建物が建ち並んでいた。

空襲後の1945年、愛楽園の建物65棟の内、消失、全壊、半壊したものが58棟で傷つきながらも使用できたものは、婦長官舎、医局、職員浴場、面会室、動物飼育室、監禁室、恩賜記念館の7棟であった。

6.3　琉球列島米国民政府時代

終戦後、愛楽園の復興を始め、従来の療養所の形態でなくそれぞれの生産技能者別のコロニー[注3)]方式の形態を作り出していた。治療棟や病室を中心にし、近くに不自由者宿舎、少年・少女舎など介護を要するグループと、その介護に当る青年や乙女たちの宿舎を一群にして「花園区」とした。北海岸の磯近くに漁をする人たちが暮らす「磯浜区」、農作業に便利な西側耕地寄りが「月の里区」、入園者自治会業務に従事しやすい地域に「星の原区」といった配置計画だった。

居住区の建物は、夫婦舎に規格茅葺住宅(9坪)が造られ、米国民政府から譲り受けたコンセット[注4)]資材で39棟の各施設が造られた。

6.4　琉球政府時代

この頃から現在の配置と同じような配置計画が見られる。琉球政府は、戦後の混乱状況からようやく立ち直ってきた愛楽園の恒久建築計画を推進。1953年鉄筋コンクリート2階建ての独身舎を機に恒久建築がスタートした。また、宗教施設など医療以外の施設の充実が図れるようなり、高齢化に伴い老人ホームなどの施設が見られるようになる。また、1979年に独身舎が、長年の大部屋生活から個室生活へと変わった。

7．居住空間の変遷【図-4】

7.1　開園当初

居住舎は、1棟当り165㎡木造瓦葺平屋建て【図-5】。10棟中4棟は女子舎、6棟は男子舎であった。1棟5室に分け、中央の1室が食堂。夫婦舎、少年舎もあり自治的に共同生活していた。

7.2　沖縄戦、空襲前

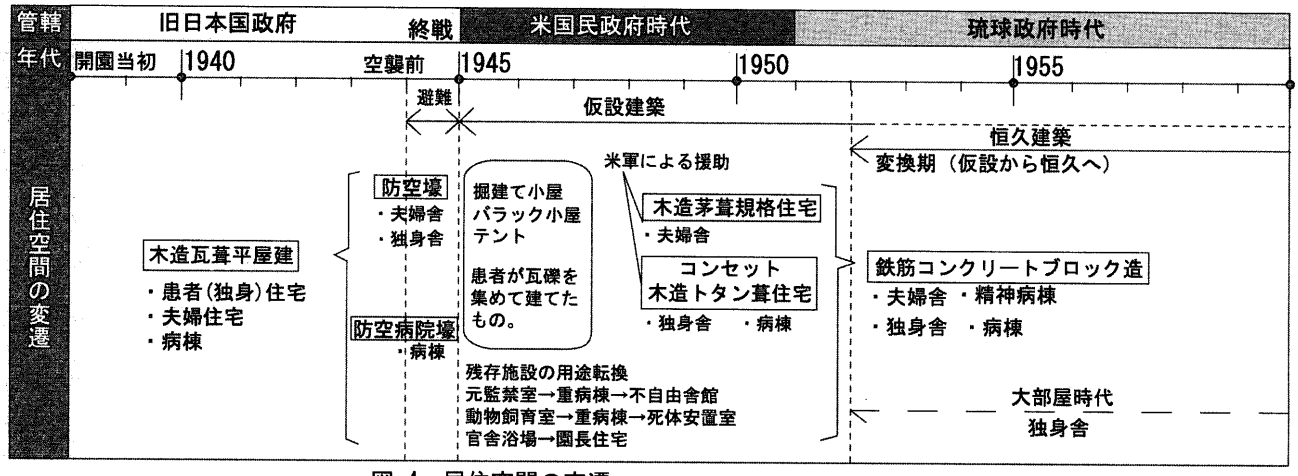


図-4　居住空間の変遷

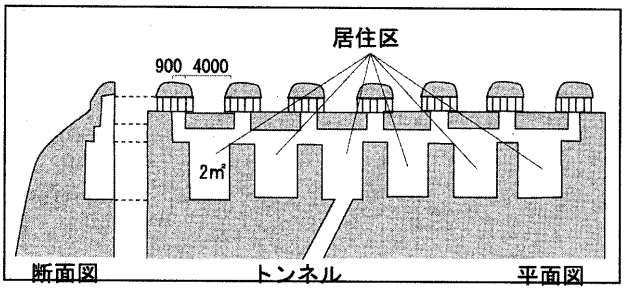


図-6　横穴防空壕

図-7　コンセット

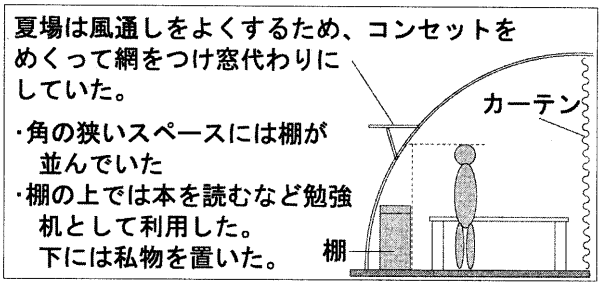


図-8　コンセット断面図

愛楽園内に重病者【図-6】、保育所、医局用の壕が合わせて約 60 ヶ所作られた。

7.3　琉球列島米国民政府時代

廃墟に帰した愛楽園では、夫婦は 2 人の独身者は気の合った者同士が一緒になって自ら、雨露をしのぐ程度の掘建て小屋を建てた。1946 年になると米軍から譲り受けたコンセット資材を使い、若者が主になって病棟や居住舎の組み立て作業が始まる。

コンセット【図-7, 8】は、フィート単位で設計され、屋根はアーチ型のトタン葺、アーチとアーチの間が 4 フィート（約 1.2m）ある。床はベニヤ板張りで床幅は 20 フィート（約 6m）であった。出入り口は 2 ヶ所つけられており、1 つのコンセットに 20～30 人の入所者が生活していた。真ん中がカーテンで仕切られ、2 列に並び両端に頭を向けて寝ていた。入口近くには食堂として利用するスペースが設けられ、頭のぶつかってしまうような場所にある余分なスペースには棚が並べられていた。

1947 年になると夫婦たちの仮住宅建設が進められ、1 棟 2 世帯入居、間口・奥行き 18 フィート（約 5.4m）の茅葺規格住宅【図-9, 10】ができた。

茅葺規格住宅は、壁はテントを切り張りしたままで台所には床がなく、かまどは石を 3 個置いただけでいつも砂埃が舞っていた。入所者の話によると、茅葺規格住宅で生活していた人たちは、自分たちの手で後からスペースを付け足し生活の場を広げていったという。2 世帯が暮らすには約 9 坪の茅葺規格住宅は非常に狭かったということが分かる。

7.4　琉球政府時代

恒久建築がスタートし 2 階建ての独身舎が建設された。独身舎は、1 階には 14 畳の大部屋が 4 室、便所・食堂・浴場が付いていて、1 室の定員が 7 人であった。2 階も 1 階と同様間口 2 間奥行き 3 間半の 4 つの大部屋が並んでいた。14 畳の大部屋では畳 2 畳を I 字型に敷いたスペースが一人当りのスペースとして使われていた。

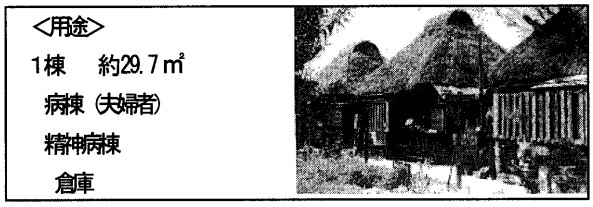


図-9　茅葺規格住宅

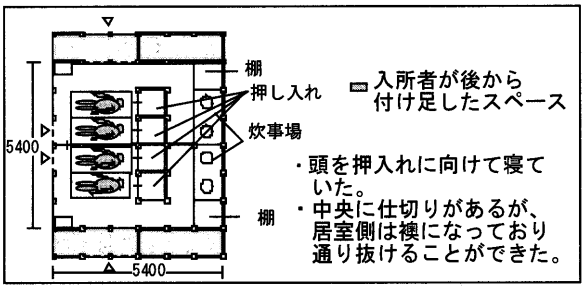


図-10　茅葺規格住宅　内部

1960年頃から脱大部屋機運が高まり、1979年鉄筋コンクリート平屋建て、1棟8室の4畳半の個室制、箪笥・押し入れ・シャワー・トイレ付の、独身不自由者宿舎60床が完成した。

8．両園における居住空間の変遷の比較

居住区は入園者の属性によって大きく分けられる。独身舎・夫婦舎・少年少女舎・男女青年舎などが住む軽症宿舎と、生活していくのに介助を必要とするものが住んだ不自由者宿舎に分けられる。また、こうした宿舎の他に病棟（病舎）がある。ここでは、独身舎【表-1】、夫婦舎【表-2】においての愛楽園と敬愛園での居住形態やプランにどのような相違点があるのかを分析する。

8.1　独身舎の変遷【表-1】

両園とも、開園当初は大部屋の雑居生活から始まった。しかし、その後の経過は全く異なる。愛楽園は、沖縄戦での被害の後、米軍にコンセット資材を貰い自ら組み建てた。その後も、琉球政府により恒久建築に建替えられた。

敬愛園は、開園当初は1室12.5畳の大部屋から1室6畳の2人部屋、更に1室6畳の個室へと移った。いずれも1人当たりの居住面積は増加した。

8.2　夫婦舎の変遷【表-2】

愛楽園は、独身舎と同じような変化をしている。恒久建築になってからは、今回詳しく調査していない。敬愛園は、開園当初1室に3～4組の夫婦が雑居生活をしていた。この記録は、愛楽園には見られないことである。その後は、個室制となり時代とともに室面積の増加が見られる。

表-1　両園の居住空間の変遷年表（独身舎）

愛楽園	年代	敬愛園
	1935	①開園当初（1935～1949） 《広さ》 1室12.5畳が基準。 《プラン》 1棟4室。各室は西から1号、2号と呼ぶ。宿舎の中央にある12帖ほどの板の間を食堂(広間)と呼び、配膳や食事に利用。その奥に共同の流し場と洗面所がある。洗面所の北側は共同便所。食堂南側正面は三和土で、2号室と3号室を利用する人が玄関として使用。 《居住形態》 4室でひとつの宿舎を形成する大部屋。1号室と4号室には小さい玄関口があった。1室は6人ほど居住するのが普通だったが、1室8人も珍しくなかった。 《構造・材料》 木造平屋
①開園当初（1938～1944） 《広さ》不明 《プラン》 棟を5室に分け、中央の1室が食堂。 《居住形態》不明 《構造・材料》 木造瓦葺平屋	1938	
②壕（横穴壕）（1944～1945） 《広さ》 1人当り約2㎡【図-6】	1944	
③コンセット（1946～1952） 《広さ》不明 《居住区形態》 生産技能者別のコロニー方式による配置構成。コンセット5棟・炊事場1棟・便所1棟を1区として、4区存在。 《構造・材料》 コンセット資材	1946	
	1950	②戦後の変革期・整備期（1950～1979） 《広さ》 1室6畳 《プラン》 長屋形式の1室個室型寮舎。各室炊事場・トイレ付。 《居住形態》 1室2名。 《構造・材料》 木造平屋
④恒久建築（1952～1977） 《広さ》 1室14畳（大部屋） 《プラン》 大部屋が8室あり1室の定員は7人。1階には4つの室と便所・食堂・浴場、2階も4つの室と便所がある。食堂の屋根はベランダになっていて外階段が付属。 《居住形態》 1室に7人の雑居生活。 《構造・材料》 鉄筋コンクリートブロック	1952	
⑤個室型独身不自由者棟（1978～2001） 《広さ》 1室4畳半 《プラン》 1棟8室。押入・シャワー・トイレ付。 《居住形態》不明 《構造・材料》 鉄筋コンクリート	1978 1980	③充実期・現在（1980～2001） 《広さ》 1室6畳(居室) 《プラン》 長屋形式の1室個室型宿舎。各室トイレ・洗面所・台所付。 《居住形態》 個室制。入所者の手によって増改築された。 《構造・材料》 木造平屋

9．まとめ・展望

9.1　配置計画

愛楽園の配置計画は、1938年の開園当初必要最小限の施設でスタートしてから、戦前までは入居者の増加に伴う施設拡張が繰り返された。戦後、空襲により園内のほとんどの建物が消失したため、仮設建築が建てられ、コロニー方式を用いた建物配置が行われた。琉球政府時代になると、園内の本格的な復興が始まり恒久建築が建ち始め、現在の基礎となる施設配置が行われた。

愛楽園は、戦後の米軍からの復興作業や物資の援

表 - 2　両園の居住空間の変遷年表（夫婦舎）

愛楽園	年代	敬愛園
	1935	①開園当初（1935～1949） 夫婦舎2棟が建てられたが、少年少女舎として使用。1937年に優生手術を条件に入所が許可。 《広さ》 1室12.5畳 《プラン》 1棟5～8室・炊事場・洗面所付の12.5畳居室で玄関・トイレは共同。各室が廊下でつながっている大部屋。 《居住形態》 1室に3～4組の夫婦が雑居生活。その後、内縁夫婦舎は増加の傾向。この夫婦舎への入所者には、優生手術（ワゼクトミー）を行った。 《構造・材料》 木造平屋
①開園当初（1938～1944） 《広さ》不明 《プラン》 棟を5室に分け、中央の1室が食堂。 《居住形態》不明 《構造・材料》 木造瓦葺平屋	1938	
②壕（横穴壕）（1944～1945） 《広さ》 1人当り約2㎡【図-6】	1944	
③茅葺規格住宅（1946～1952） 《広さ》 間口18フィート（約5.4m）、奥行き18フィート。 《居住区形態》 生産技能者別のコロニー方式による配置構成。20～25棟（40～50世帯）、便所2～3棟を1区として、3区存在。 《構造・材料》 木造	1946	
	1950	②戦後の変革期・整備期（1950～1979） 《広さ》 1室4.5畳 《プラン》 長屋形式の1室個室型宿舎。各室に炊事場・洗面・トイレ付。 《居住形態》 夫婦だけの居室 《構造・材料》 木造平屋
④恒久建築（夫婦舎）（1952～1977） 調査未完	1952	
調査未完	1978 1980	③充実期・現在（1980～2001） 《広さ》 1室6畳の居室が2室 《プラン》 長屋形式の二室個室型宿舎。居室2室にはトイレ・洗面所・台所付。中庭に個人で浴室などを増築した人もいる。 《居住形態》 夫婦だけの居室。以前は、夫または妻のどちらかが亡くなった場合には独身舎へと移っていたが、現在はそのまま夫婦舎で生活している。 《構造・材料》 木造平屋

助により米軍政府と深い関わりを持っており、配置計画はその影響を受けて変遷しているといえる。

9.2　居住空間

愛楽園の居住空間は、開園当初木造瓦葺住宅平屋建てで、内部空間についての詳細は不明である。しかし、入所者数が定員数を超えていることから雑居生活をしていたと考えられる。戦争が始まると、防空壕での生活が始まる。戦後、入所者たちは居住空間を確保するため自ら瓦礫を集め掘建て小屋を建てる。その後米軍の援助を受けコンセットや茅葺住宅での生活となる。これらはいずれも仮設建築であり戦後の混乱期を一時回避するためのものであった。琉球政府時代になると入所者の寮舎も仮設建築から恒久建築へと移っていく。しかし、14 畳の大部屋に 7 人での雑居生活であった。その後、個室化への要求が高まり 1979 年に個室制の独身不自由者棟が完成する。変遷の特徴として、戦後に仮設建築によって一時的に居住空間を確保した時代と、恒久建築により安定した居住空間を獲得し、大部屋から個室へと変化していった時代の 2 つに分けられる。

愛楽園の居住空間は、沖縄県のハンセン病政策より、時代背景とハンセン病行政を行う政府に影響を受けていることが明らかになった。

9.3　居住空間比較

9.3.1　愛楽園・敬愛園の比較

愛楽園・敬愛園ともに、入園者の居住空間は、開園当初から現在までに数回変化してきている。しかし、その内容が全く異なる。敬愛園は、開園時の大部屋から時代の変化、治療・医療の充実に伴い、一人当りの居室面積が増加している。一方愛楽園は、開園時の様子は不明だが戦前は防空壕、戦後は仮設建築、その後恒久建築の大部屋とその時代を生きるために最低限の生活をしているといえる。

愛楽園の入園者は、社会情勢や政府の変化により、生活環境を大きく変えられているといえる。

9.3.2　愛楽園での独身舎・夫婦舎変遷の比較

愛楽園の独身舎・夫婦舎の変遷を見ると、②横穴壕（～1945 年）までは区別はない。しかし戦後、独身舎はコンセット、夫婦舎は茅葺規格住宅と住み分けられた。全体の流れとしては、両舎とも大部屋から個室へ変化しているといえる。

9.4　今後の展望

今後の検討として、今回明らかになった療養所の居住空間で入所者がどのような生活をしていたのかを明らかにしていきたい。

注釈

1) 日本最初の民間の救らい支援団体
2) 日本ＭＴＬの沖縄支部
3) 集団居住地
4) アーチ型のトタン葺きで建てられる仮設の建物

参考文献

1) 平成 13 年度修士論文ハンセン病療養施設の建築計画に関する研究　西室田　周作
2) 命ひたすら　療養 50 年史　国立療養所沖縄愛楽園入園者自治会
3) 沖縄における癩管理の現状　犀川　一夫
4) 沖縄における癩の外来治療の諸問題　犀川　一夫